

楷

銘錄集

禮





滑稽銘錄集卷之三

尾陽沙門 馬州 撰

尾張

熱田宿

雪亭記

鶴羽城

化光

臨今此雪亭の水を飲まば松ていふ中に
雪のこのまゝありと使初めより二十五年計
おのゝちなる所はね楓木のまゝまゝ月影
おのゝちなる所はね楓木のまゝまゝ月影
おのゝちなる所はね楓木のまゝまゝ月影

ま東葺と拉て本振作のちるまよひて風面と
凌と世務暇わく空ふかて稽察の下より人
しらざ事大わたりと抱ひ或ハ眼とまよひのそふ
就世耳と通振るまよふく雪まよひたふく
巧ひめ何と北のまよふく不意とまよふく也
移いあらんくく結ぶ連珠の佳能とまよふ
人あは此の論まよふ利欲るまよふく堅く
娘いあふくまよふく

まま水と雪れ白しや夜の電

梅うきり青とあせくおあは 他光
巾のまよふまよひくつとまよ
彩法師もまよふ月あはあうあ
城まよひく越てまよふや夜のた 竹為
中まよひくまよふつと凡のまよふ子れ 拾翠

佐屋驛

鳴風館

猶のまよふ陣れ霞よかりくまよ 吟山
石女乃此せうく抱ふ根芥れ

五山此尺牘一紙

紙上之文字

白首之公

二神の御加護

事に成る

跪進乃

最如也

下此等文字

人形の風中

後培園
巨橙

趙相連
士宣

かゝる如き

之類と

大抵此

等々

秘文

尤も

上之

塔下

三

松榮岸
寄潮

阜
宇林

唐松軒
輕軒
加

添葉堂
一珍

浪月舍

后乃与伊摺之伊布也
兔足

仲勝女院古忠とさきふり

人子多如牛毛

紙衣に七情の氣をさへ

本
山
之
風
中
萬
山

陳鼓島下亞留亞壑

通之やきい客より生れ飛

省は共工子月も今を枯野哉

可々鞋と栴の坪あや梅の記 鄰ト堂 而立

伊智熊野殿口切也郭下云

東山先生集卷之五

子宜北布 錢金 永和 雪 九 亭

くさの糸り 地やう夢乳をたぐち 幽麓下 木危

卷之四 寄方信友 留士稿

生簡此卷中少缺如仁多也

[illegible]

川安賀郷

大蛇丸記

月空庵

露川

今繡朝りくやく尾城の乾きし年又里
にいて川安賀の里四面より田とて
五穀をさまよふにわくはくはく
を振て傳へて水ある事欠と伝へ東
河の民もおさく方々海や青より
此邑は凡く絶えりたるくはくはくはく
相客門とて多たあるにくはくはくはく

おしとあり一因るは朋と撰い今や
甲寅の月日例は一文字は伝へ大蛇丸と
号し一農業商賣の暇とてりて安は安と
すにいて思ふは中れ安き
滑智のいへきなりけり此地の門子
おしとありくはくはくはくはく

奇雲亭記

八雷

晨よ起りありくはくはくはくはく
居る勝とて安きはくはくはくはく

任うゝ一りれ陰影のくく我のるま
そおまふ防くみけくくまめて奇雲ま
称と夢里とほくくくくくくくくくく
志と山川る里と三尺の机と漏れく
暖候吉野のくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく

常の業や口乃目候うくくくくくく
何箇國睦くくくくくくくくく
後中と者候くくくくくくくくく
新法師のくくくくくくくくく

附合

くくくくくくくくくくくくく
古井くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく

凡山れ雲母のまじふ月
影成り多し一かふたふとて
ハ雷

雲靉と云ふあふ一たの記 万化
近きゆり一雲ははひあふあふ
二口一 雲雲揚く月見ふれ
化して味を伝ふや室乃梅
古よのあふ海にさやあふ蝶 木旦
思ふれ有るれ風や帝一機

あ月やあふれ地一草の語
夕波の千もや海人れらう縄
を海にけつのがらあ揚中荏 天舌
一日あふ伝仙人やあふ 瑞
細りふれあふあふあふ蟻群
室吹や燈く小窓の梅乃む

附合

神儒佛とら 瓢箪の夢
雲王れ運たけい月あふて

秦上角石少而日法華弘 抱星

ゆけしきふさのり

臨書成及字之如強石也

雲舟をくわし、我をけ累れんぞ

神通十界之離之船 桃也

日中に眼はれまゝゐる

海膝のきよき世界を志す草

初實成哉不古可りの如し

沈氏之書
貞凌

須臾何所至也

月一毛よるすの浮名裏の空

種あり相結みず不天

日
の
ま
う
ち
に
あ
る
を

玉の首飾を以てより千

中 替ふはちうへへとては所なり 東虹

五月とあるところん公の巻

何々やわくくも因果経 吟松
尾——解もいふくつの中風
新法師——法をわくや松月 兔耳
岩ねれわくくや囀とく海
至泊ま風みうくくも胡蝶ふ 遊沂

附合

我あり花と海は仙術
る金と掘りて照ふれうら
反れ砂北り 細乃霍乱 抄所

ふりてきくくく水仙花 旭川
年月の傍ふきくくくの何 井元
おくくく死流轉乃ふま張れ 槐野

同諸君集大蛇樓卒賦 仙源亭 桃也

蘿月松風避俗塵 詞花簇簇滑甃人
乾坤此會多幽興 誰識樓中別有春

題大蛇丸 谷村氏 秀實

不現鄭門妖 豈蒙漢祖屠 化城一草芥
舍壽域太空俱

何々やわくくも因果經 吟松

尾——解もいふくんのうへ風吹

新法師——法とわくくや松月 兔耳

岩わくくくくくやわくくくく

主泊君風ぬくくくくくく 遊沂

附合

我あり花とゆは仙術

石と握りて照ふた——

及れ砂北り 細乃霍乱 抱所

探梅舍可卜

ちきりし丹後の玉天を搦きと日本とを
 じやけりしとぞ奴乃なんちを南北と
 二十里ぐらゐある一里はなつと海と
 ちきりし虹の晴空なりかきけりや
 白砂灘にやして布とをさうしうかひ
 ちきりしちきりしつとくちきりしつと
 ちきりしちきりしつとくちきりしつと
 ちきりしちきりしつとくちきりしつと

形は似たり大崎小崎とて寫眞はして
ふ玉乃夢成及て是の等一は々に風の
溪村跡とて細川約き所なる所凡
物と云ふ事と如の風情也ありと云ひて
ふは乃白雲とて互齒に看極と云ふべ
有中此山細い隙のほどは雲を握りて抱さ
ぬおは風より波より須江と入るれ術と

ちうと一眼中に万々紙收め、弄たるを鳴呼
おたるうを鳴呼

標立丸及び名海の建造せ

数枝きけりさるる當んであふらる可ト
河骨と指人形とあふらる可ト
うれあれあや思ふれさし思
候き書のせとより思ふ一層愛

附合

柳さるる風あや思ふ人柳れ
化さるるでさるる山城可ト
船馬の血あ押さるる
性根と探さるる思ふ思

水うねのわさるる思ふ思

十白表

遊月

満月やあふるる思ふ思乃千世界
きくくきく思ふ思夜登り思
子花と年思ふ思接思思可ト
流乃我と思ふ思思思思
思思思思思思思思思思思
思思思思思思思思思思思
木旦

寸白と他りてりておのりて 抱星

隊のぬるれ瓦れうやき 東虹

花いしく持をるれふ十日 万化

海川あうるる海のまの 遊沂

佐布里邑

山猫も限と安うやりのちやる 浦邑

送り火よりきりきりてあふれ

白砂と海よりうやうやりみら

後一場り人てきりきりて雲の舟

ハの字は実れやう角とれ砂島 鶯宿

犬山縣

あまきりきりてきりきりて 雨六

たぐいし人商人れりてきり

里合やねとりきりきりてきり

一きりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきり

人ぬきまゐりて極くはなれぬ
 相ふいふのききなり——非ず月
 舞ふとてはなれぬとてはなれぬ
 大佛乃くはなれぬとてはなれぬ
 ちくちくはなれぬとてはなれぬ
 約とてはなれぬとてはなれぬ
 能のせれぬとてはなれぬ
 縁拂やアリ大黒二子達を

附合

ちくちくはなれぬとてはなれぬ
 仲くはなれぬとてはなれぬ
 始くはなれぬとてはなれぬ
 ちくちくはなれぬとてはなれぬ
 ちくちくはなれぬとてはなれぬ

ちくちくはなれぬとてはなれぬ
 ちくちくはなれぬとてはなれぬ

ちくちくはなれぬとてはなれぬ
 ちくちくはなれぬとてはなれぬ

附合

咲ぬれ思ふはぬれすゞめ
幻子童子ぐさくくくく

七日未だぬれぬ帰るふたり 涼本

あけけけけけけけけけけけ

まきまきまきまきまきまき

有のなまけけけけけけけけ

うけあけけけけけけけけけ 二勇月

ふふふふふふふふふふふふ

葉のむやふふふふふふふ

ハルや鬼ハセや相きふふ

ふふふふふふふふふふふふ

小使とふふふふふふふふ

唇あけけけけけけけけけ

乃く人のふふふふふふふ 周意

賀辰川一風流とけけけけけ

ふふふふふふふふふふふふ

幸終天ふふふふふふふふ

骨節也。氣之出入由相撲在。

不
玉
此
移
也
勢
人
後
9
月

葛の純子に襦袢

下所此一照録と志かゝる實
 多う乃強りどやさふ録
 色も香りと負ふたたの事
 庭中と筆うゝ續く入門



